

主 題：互いに赦し合いなさい

聖書箇所：マタイの福音書 18章21-35節

テーマ：クリスチャンとは、主によって赦された者たちであり、互いに赦し合うようにと、みことばは教えています。

きょうは、マタイの福音書18章から学びたいと思っています。クリスチャンとは、主によって赦された者たちであり、キリストに属する者のことです。それは私たちのことであり、そして私たちが互いに赦し合うことを主が喜ばれます。このマタイ18章に記されている出来事が起こった場所は、ガリラヤ地方です。17：24に「彼らがカペナウムに来たとき」と書かれています。このカペナウムという町はガリラヤ湖の北側にある町です。また、19：1では、「イエスはこの話を終えると、ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行かれた。」と記されています。そしてこの後、イエス様はエルサレムへ向かう旅、十字架への旅に向かうこととなります。20：18でイエスは「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。」と言っています。このエルサレムへの旅、十字架への旅、この旅こそ私たちに赦しを与える旅でした。

#### マタイ18：21-35

「：21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」：22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」：23 このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。：24 清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。：25 しかし、彼は返済することができなかつたので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。：26 それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。：27 しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。：28 ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。：29 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。：30 しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。：31 彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。：32 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。：33 私が おまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』：34 こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。：35 あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。』

#### 1. 赦しに関するペテロの質問とイエス様の答え 21-22節

##### 〈ペテロという人物〉

ペテロは、イエス様に声をかけられたとき、すぐに従ったことがマタイの福音書4：18-20に記されています。「：18 イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。：19 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」：20 彼らはすぐに網を捨てて従った。」と。ペテロは非常に行動力があり、自信家であったと言われています。しかし、その反面、臆病な面もあったようです。聖書を見ていくと、ペテロは常に弟子の間ではリーダー的存在でした。そしてこのペテロはマタイ16：16で、イエス様に対して「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と信仰告白しています。ペテロは主としてユダヤ人に対する伝道に用いられました。

## ①ペテロの質問

そのペテロがイエス様に「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」と質問したと記されています。ペテロは自分に対して罪を犯した兄弟を赦すということは知っていたのです。しかし、その赦すことには限度があると思っていたのでしょうか。この当時、ユダヤ教の教師——ラビとも言いますけれども、彼らは三度まで赦してあげなさいという教えをしていました。もし人が一度罪を犯した場合には赦される、二度罪を犯した場合も赦される、三度罪を犯した場合も赦される。しかし、四度目に罪を犯した場合には赦されない。これがこの当時のユダヤ教のラビの教えでした。ペテロは七度まで相手を赦すなら、自分の赦しの態度をイエス様は褒めてくれるのではないかと、そういう自信を持っていたかもしれません。私は七度も相手を赦しますと言ったペテロの赦しの態度は、自己中心的な思いの表れであったかもしれません。そして七度まで相手を赦すなら十分でしょうかと問いかけたペテロに対して、イエス様は「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」と答えます。ペテロが、自分に罪を犯した相手を私は七度まで赦しますと言ったことに対して、イエス様はその70倍までと言われたのです。

イエス様は、罪を犯した者が悔い改めたなら490回赦してあげなさいと言われたのでしょうか？自分に対する相手の犯した罪を数えて記憶しておけますか？3回くらいまで記憶できる方がいるかもしれません。でも150回、200回、300回、400回、490回、はい、491回目のあなたの罪は赦しませんということをイエス様は教えているのでしょうか？イエス様の教えは、相手を赦す、その赦しには限度があると教えているのではありません。悔い改めた者に対する赦しは、限度はなく、無制限に赦してあげなさいとイエス様は教えているのです。何度でも何度でも赦してあげなさいと主は言われるのです。この無制限の赦しこそ、イエス様の教える赦しの姿です。ルカ17：4に「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」と書かれています。このみことばも同じことを教えています。1日に八度目の罪は赦す必要がないという意味ではありません。赦すことが私たちの日常の姿であるべきだと教えているのです。世の人からすると、1日に七度も罪を繰り返す人の悔い改めは本心からのものかどうか、疑いを投げかけるかもしれません。しかし、私たちクリスチャンの特徴は、赦しの態度に現れてくるのです。相手が悔い改めたならば、何度でも赦してあげなさい、イエス様はこう言われるのです。当時のユダヤ教の教師たちは三度までと言いました。ペテロは七度まで赦しますと言いました。しかし、イエス様の答えは何度でも、何度でも、赦してあげなさいです。皆さんの赦しはどのような赦しですか？何度でも、何度でも、そのような赦しでしょうか？

## 2. 大きな借金を赦されたしもべ 23-27節

### ①王は借金をしているしもべたちに対して清算をしたいと思います。

この後、イエス様は例えをもって赦しについて教えられます。23-27節では大きな借金を赦されたしもべのことが書かれています。23-24節をお読みします。「:23 このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思います。:24 清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところ連れて来られた。」イエス様この地上の王の赦しを例にして、主の赦しがどのようなものであるかを教えようとされました。ここに「清算」ということばが出てきます。このことばを国語辞典で調べてみると、「貸し借りを計算して、片をつけること」、また「過去の関係に始末をつけること」、そういう意味を持ったことばです。

さて、最初に連れて来られたこのしもべの借金は1万タラントだったと書かれています。1万タラントとは、返済不可能な金額であることを意味しています。この大きな借金をしているしもべに対して、主人はすべての持ち物を全部売って返済するように命じました。しかし、このしもべはもう少し待ってください、そうすれば全部お支払いしますと言いました。返済の猶予を申し出たのです。このしもべの

借金の額は1万タラントで、全部清算できるような金額ではないことをこのしもべも、主人も知っていたのではないのでしょうか？みことばは「それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。」と26節に記しています。「主人の前にひれ伏して」と記されています。この「ひれ伏して」ということばは、「完全な降伏」を意味しています。このしもべは、自分の借金が自分の力で返済不可能な金額であることをよく理解していたのです。またそのことを十分に知っていた主人は、その大きな借金を自分の方から免除してやりました。この主人は、このしもべを「かわいそうに思って」と書かれています。この主人はあわれみの心をもって、しもべの大きな借金をすべて免除してくれたのです。

それは私たちに対する主の赦しを表しています。私たちが罪人であったとき、主に対する私たちの借財はどのぐらいの額だったのでしょうか？自分の力で払い切れる額だったのでしょうか？私たちは1万タラントに相当するぐらいの、返済不可能な借金を主に対して持っていたのです。私たちは自分の力では清算できない大きな罪を主に対して持っていたのです。自己破産した者であったのです。しかし主は、私たちの罪がこんなに大きなものであったにもかかわらず赦してくださったのです。私たちは自分の罪の大きさを知ったとき、自分の力でその罪を清算することができない者であり、ただただ主の前にひれ伏すことしかできませんでした。主に自分自身を完全に明け渡し、ただ主に助けを乞うだけ、ただ赦しを乞うだけでした。そのような私たちを主があわれんでくださり、すべての罪を赦してくださり、そしてみもとに引き寄せてくださったのです。エペソ2：1-5、8-9に「：1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、：2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。：3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。：4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、：5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」、「：8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。：9 行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。」と書かれています。主の赦しは、主の恵みの表れでした。主の赦しは主からの一方的な愛の表れだったのです。

### 〈主の赦しの姿〉

私たちに及んだ主イエス・キリストの赦しとはどのような赦しだったのでしょうか？この主の赦しの姿を見ていきたいと思えます。それはイエス・キリストの贖いです。この「贖い」ということばは、「代価を払って買い取る」という意味です。主イエス・キリストは自分の血を注ぎ出すことによって、完全な永遠の贖いを成し遂げられました。ヘブル9：22に「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」と書かれています。旧約においては、年に一度、大祭司が動物の血を携えて至聖所に入り、贖いの行為を行いました。しかし、それは不完全なものだったのです。ヘブル9：12には「また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」と書かれています。この「成し遂げられた」ということばの意味は、贖いは主イエス・キリストの血がささげられたことによって完了したということです。そしてこの贖いは神の前に完全なものでした。ゆえに著者は、「永遠の贖い」と言い表しています。私たちの罪の赦しは、ただ一度の主の贖いのみわざである、あの十字架によって完全になされました。旧約の時のように、毎年毎年なされる必要がなくなったのです。同じヘブル9：25-26に「：25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることにはなさいません。：26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」と書かれています。主イエ

ス・キリストの十字架がなかったならば、私たちの罪の赦しはありませんでした。私たちの大きな罪、自分の力では解決できなかった罪のゆえに、大きな犠牲が払われたのです。主イエス・キリストはみずから進んでご自分のいのちを私たちの罪のためにささげられました。そして主は十字架の上で「完了した」（ヨハネ 19：30）と叫ばれました。私たちの罪は完全に赦されたのです。主イエス・キリストの贖いのみわざである十字架は、私たちと神との和解を成し遂げてくださり、私たちの罪はすべて赦されたのです。私たちは罪を悔い改めて、イエス・キリストを自分の救い主、主として信じる信仰によって、罪赦され救われました。このすべては神の恵みによることだったのです。

パウロはエペソ 1：7で「私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。」と述べています。これが主の赦しの姿だったのです。ジョン・パイパーという先生は著書の中で以下のように述べています。「赦しは私たちの側には、何の代償もいりません。私たちが犠牲を払って主に従ったとしても、それは赦されたことへの応答であって、原因ではありません。ですから赦しは恵みです。しかし赦しは、イエスの側にはいのちという代償を求めました。ですから赦しは義とも呼ばれます。ああ、福音とはなんと貴いものでしょう。神は私たちの罪を私たちに突きつけることをなさらないのです。そしてキリストのなんと美しいこと。その血によって、神は義のうちに私たちを赦してくださいます。」と。

### **3. 赦されたしもべのふさわしくない応答 28－35節**

27節まで、とても大きな借金を赦されたしもべのを見てきました。28－35節には、この赦されたしもべのふさわしくない応答が記されています。主人によって大きな借金を免除されたしもべは、自分にわずかな借金をしている同じしもべ仲間に対して、「借金を返してくれ」と言いました。このしもべの借金は100デナリと聖書は記しています。なんとあの1万タラントと比べたら、60万分の1のわずかな金額ですが、このもう一人のしもべもすぐに返済できなかったのも、もう少し待ってくれるように頼みました。しかし、大きな借金を免除されたしもべは、その頼みを受け入れずに借金を返すまで彼を牢に投げ込んだと記されています。主人のあわれみによって赦されたこのしもべ、なんとあわれみのない行いなのでしょう？大きな借金を赦してやったこのしもべに対して、主人は「悪いやつだ」と言っています。主人はなぜそう言ったのでしょうか？この大きな借金を免除されたしもべには、同じ仲間のしもべを赦すあわれみの心が全くなかったのです。主人からあわれみを受け、また恵みを受けたのに、そのあわれみを、その恵みを、仲間にも与えようとしなかったそのしもべに対して、主人は「悪いやつだ」と言い放っているのです。そして主人は、この悪いしもべを「獄吏に引き渡した」と書かれています。「獄吏」というのは、「拷問にかける者」、あるいは「懲らしめを与える者」のことです。

これは、イエス・キリストの贖いのみわざによって罪赦された者が、同じように主によって赦された兄弟が自分に対する小さな罪を悔い改めて、赦しを乞うているにもかかわらず、赦すことを拒むというあわれみのない態度、愛のない行いに対して、主の懲らしめがあることを教えています。赦された者が、自分の権利だけを主張する姿を皆さんはどう思われますか？マタイ 6：14－15に「：14 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。：15 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」と書かれています。このみことばは、人を赦すことで、その人に救いが与えられると教えているものではありません。主によって罪赦された者のふさわしい応答がどのようなものであるのかを教えているみことばです。またヤコブは、ヤコブ 2：13で「あわれみを示したことのない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。」と言っています。主によって赦された者が、悔い改めた兄弟を赦さないということがあってはなりません。私たちはひとりひとり大きな負債を負っていましたが、主によって赦されました。兄弟の小さな負債を赦すことは、主によって赦された者のふさわしい応答です。しかし、私たちが真に悔い改

めた兄弟を赦さないのであれば、あわれみのない私たちに対して、主の懲らしめがあるのです。獄吏に引き渡されたしもべのようにです。

きょうのテキストの35節にはこう書かれています。「心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。」と記されているとおりです。しかし、主からの懲らしめ、また試練は、私たちの心を砕くためのものです。もう一度ヘブル12:5-7、10-11をお読みします。

「:5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。」、「:10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。:11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」。

#### 4. 結論 ——赦し合いなさい——

さて、きょうのみことばの結論に入りたいと思います。私たちは自分では払い切れない、主に対する借金を免除されました。主に対する大きな罪を赦されました。であるならば、主が私たちを赦されたように、私たちの兄弟と赦し合うべきです。主の赦しは大きな犠牲を伴った、無条件の赦しでした。もし私たちが互いに赦し合うことを実践しないのであれば、主の訓練、懲らしめがあるのです。それは私たちの心を砕いてへりくだった者とするための懲らしめであり、試練なのです。教会は、この世から召し出された者たちの集まりです。それは主によって罪赦された者たちの集まりであるということです。そのことを考えるとき、私たちクリスチャンの姿は互いに赦し合うという特徴を持った者たちの集まりであるはずで、パウロは、エペソ4:32で、「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」と述べています。イエス様は十字架の上でこう言われました。「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」、ルカ23:34です。今まさに処刑されようとしているイエス様は、自分を十字架にかけた者たちのために、父なる神に赦しを願っています。

ジョン・パイパーという先生は「赦すことは仕返しをすることではありません。そうする権利を放棄することです。」と書いています。皆さんは、どうしても赦すことができない人を心の中に持っていますか？確かに相手を赦すということは、私たちにとって大きなチャレンジです。私たちは祈りましょう。そして聖霊の助けによって、優しい心を持って相手と和解しましょう。そしてその方を受け入れましょう。互いに赦し合いなさい、これがみことばの教えです。罪赦された者たちの集まりである教会の真の姿なのです。赦された者が心から相手を赦すことは、何よりも主が喜ばれることです。何度でも、何度でも赦してあげなさいとイエス様は言われました。また主の赦しは、私たち全く値しない者に対して与えられました。それは全くの恵みによったのです。そして主は、主に赦された者としてふさわしい応答をすることを望んでおられるのです。